研究ノート

養護教諭養成課程における看護臨床実習の効果と課題

中村　亜紀，井上　文夫，大川　尚子，下村　雅昭

Effects and Issues of Nursing Practice at Hospitals in Nursing Teacher Training Course

Aki Nakamura, Fumio Inoue, Naoko Okawa and Masaaki Shimomura

Nursing teacher training courses require 30 hours of clinical nursing practice at a hospital in order to obtain a license. The practice has four purposes, 1. Learn the basics of nursing, 2. Learn about human relationships, 3. Learn about hospital functions, 4. Learn about collaboration between medical institutions and schools. This report summarizes what the students comments after the practical training, what they learned during the practical training, and the differences in learning content between different training facilities, and uses it as a resource for thinking about more effective clinical nursing training. Students are learning the communication skills of nurses and interprofessional collaboration within the hospital. They are also learning about the necessity of cooperation between hospitals and schools, and the desirable specific methods of cooperation. On the other hand, only a small number of students learned nursing skills other than communication and physical assessment performed by nurses. On the other hand, only a small number of students learned nursing skills other than communication and physical assessment performed by nurses. The point of improvement was considered to be learning more nursing skills from nurses. There are differences in training content depending on the training facility, and it is necessary to follow up with on-campus guidance.

キーワード：養護教諭養成課程，看護実習，病院実習

はじめに

看護師免許を取得しない養護教諭養成課程では，免許取得のために 30 時間の病院での看護臨床実習が必須となっている。本学では３回生時に１日６時間，５日間の日程で実習を行っている。通常の進度での履修者はこれが初めての学外実習であり，実際の臨床現場，病院施設に触れる最初の機会となる。実習は見学実習が基本であり，看護師のシャドーイングを行いながら看護師の役割や看護実践，医療現場の状況などを理解することを目的としている。実習受け入れ施設は大学近隣の多くの病院に協力をいただきつつ，入れ替わり，今年度（2022 年度）は京阪神間の７ヵ所の施設に指導をお願いすることが出来た。施設の内訳では，クリニック１カ所，一般病院３カ所，地域医療支援病院３カ所であり，病院種が様々である。実習受け入れ施設の多くで，当初養護教諭養成課程の実習指導の経験が無く，看護学生の実習内容との違いがどこにあるのかについて，特に実習部署で学生に直接指導を行う看護スタッフに戸惑いが大きいように思われた。

本学での実習内容としては，1. 養護教諭に必要な看護の基礎を学ぶ，① 診断過程及び看護過程から健康の異常の発見及び対応の仕方を学ぶ，② 看護技術の基本を学ぶ，③ 健康教育の重要性を考える，④「看護とは」について考え，学校で養護教諭としてできることを考える。2. 人間関係のあり方を学ぶ，① 患者への接し方を学ぶ，② 看護する側とされる側の基本を学ぶ。3. 病院の機能を学ぶ，① 病院の機能を学ぶ，② 病院の組織と医療体制を学ぶ。4. 医療機関と学校との連携について学ぶ，① 医療機関の利用の仕方を学ぶ，② 病院・学校・家庭との連携を学ぶ，を挙げている。実習は短期間であり，病院種及び実習部署によっても見学できる内容について違いが生じるという条件の中で，以上の内容を養護教諭養成課程の学生にどう学ばせるか，といったことは，大学教員と実習受け入れ施設指導者の中で試行錯誤しながら経験を積み重ねている。

本学の教員の実習指導体制は，医師や看護師の免許を持つものが一部含まれるが，養護教諭その他教員免許を持つものが指導にあたっている。教員は巡回指導時に学生の実習の様子をみる，実習指導者との情報交換をする，

京都女子大学発達教育学部教育学科養護・福祉教育学専攻

カンファレンスに参加する，といった際に学生の実習場所での様子を知り得るが，その他は実習場所に帯同しないため，実習記録や事後指導での報告から学生の学びの詳細を知り，評価することになる。本学では13回の看護臨床実習を行ってきた。本レポートは，その経験を振り返る機会とし，30時間という実習時間の中で，養護教諭養成課程の学生は何を経験し，何を学んでいるのか，実習先となる病院種による学びの内容に違いが生じているか。事後指導における学生の発言から，実習先での実習の方法，実習で学べたこと，学生が立てる実習目標と目標別達成状況（自己評価）についてまとめ，より効果的な看護臨床実習の在り方について検討する資料とする。

実習の方法

病院種別に各施設での実習の方法についてまとめる。

クリニック

- 診察時は，医師の横で診察の様子を見学した。
- お昼休憩が終わってから午後診が始まるまでの間は医師による講話を聞かせていただいた。
- 午後診を終えた後は毎日カンファレンスを行った。記憶に新しいうちにすぐに質問することができるため，毎日のカンファレンスはとてもありがたいと感じた。
- 医師が学校医を務められている学校での健康診断の見学に行った。

一般病院（外来のみ）

病棟での実習はなく，外来でのみ実習を行っている。

- 小児科外来の見学を中心にさせていただいた。
- 様々な診察の様子の他，車やパーテーション越しに行われていた新型コロナウイルスの抗原検査の様子を遠くから見学した。
- 予防接種，アレルギー，腎外来，神経発達に関する専門外来の診察の様子を見学させていただいた。
- 乳児健診では，乳児の病気や成長発達を見る場面や保護者の悩みや不安を聞く場面を見学させていただいた。
- アレルギーについて，3組の親子が同時に診察室に入り，子供がお弁当を食べるという形の食物経口負荷試験の様子を見学した。また，エピペンをぬいぐるみに使用した実践も行わせていただいた。
- 病院内での病児保育室にて子供たちと遊んだり，手を洗う補助をしたりし，幼い子供との信頼関係の築き方や熱のある子供たちの様子を実際に知る機会となった。
- 診察の合間に医師から小児に多い感染症や食物アレルギー，アナフィラキシーショックなどの話や資料をいただいた。

一般病院

外来と病棟で実習を行っている。

- 看護師のケアとして，バイタルサイン，血糖値測定，喀痰吸引，口腔清拭，入浴介助，シャント触診，栄養剤投与，褥瘡洗浄を見学できた。
- 理学療法士から車いすと松葉さんについての話を伺い，体験できた。
- 透析の見学を行った。
- 3名の患者様とレクリエーションを行った。

一般病院（総合病院）

外来と病棟での実習を行っている。

- 1日のスケジュールとしては8時半から申し送りを行い，午前午後とも看護師さんに同行してケアを見学した。
- 看護師さん1人に実習生1人のときもあれば，看護師さん1人に実習生が複数のときもある。
- オムツ交換，陰部洗浄，清拭，排泄介助，ベッドメイキング，喀痰吸引，点滴，カルテ入力，診察，バイタル測定の見学を行った。
- 小児科では，アレルギー経口負荷試験の見学や点滴の見学を行った。

地域医療支援病院

3ヵ所の施設で外来と病棟とで実習を行っている。

- 午前と午後にわかれて，小児科外来と小児病棟を見学させていただいた。
- 小児科外来では，午前は一般診療，午後は予防接種，1ヶ月健診，心の発達外来などの専門診療の見学をした。
- 専門診療で，予防接種や発達障害などの知識も学べた。
- 小児病棟では，バイタルサインの測定の見学，バイタルサインの測定も何回かさせていただいた。
- 患者さんとのコミュニケーション見学をし，患者さんのカルテの閲覧も行った。
- 病棟は小児科だけでなく，形成外科，眼科，血液内科の入院があり，患者さんが抱える疾患も年代も様々で，疾患名，症状，治療，様々な情報を得ることができた。
- 外来実習は8時半から申し送り，カンファレンス見学，9時から12時まで外来見学，お昼休憩を挟み，13時から外来見学，15時から病棟見学をし，最後にカンファレンスを行い，17時に実習が終了。
- 病棟実習は8時半から申し送り，カンファレンス見学9時から12時まで病棟見学，お昼休憩を挟んで13時から病棟見学をし，最後にカンファレンスを行い，17時に実習が終了。
- 実習は外来病棟と入院病棟で交互に行った。
- 最低一度，バイタルサインの測定を行った。
- 循環器系疾患，発熱外来など，様々な疾患を持つ子供

たちの診察の様子を見学させていただいた。
- カンファレンスは実習指導者と毎日行った。
- 身長体重測定，清拭，オムツ交換，点滴，沐浴，食物アレルギー負荷試験などを見学させていただいた。
- 実習場所は小児外来, 救急外来, 心臓リハビリテーション，HCU，CCU手術室。
- 1日目にPCR検査があり，PCR検査の結果が出るまで自主学習を行った。
- 院内オリエンテーションでは，病院の概要の紹介，手洗いチェッカーを使った手洗い確認や，針刺し事故防止のために取り組んでいることなどを学んだ。
- 2日目は救急外来でトリアージレベルの判断の状況など見学。
- 小児外来では, 発熱外来への受診が多数であったため, 医師や看護師から，子供たちがよくかかる疾患や予防接種についての話を聞く機会となった。
- 心臓リハビリ室で運動療法の見学を行った。
- HCU，CCUでは，多職種でのカンファレンスの様子や高度な治療の様子を見学させていただいた。
- 手術室の見学では，手術の様子や医療器具の滅菌作業の様子などを見学した。
- NASの講習で心肺蘇生やAEDの仕方について学んだ。
- 救急外来で救急車が来る前に情報共有したり，検査をしていく中で診断をつけ，チームで1人の患者さんに対応していく姿を目の当たりにした。

実習で学べたこと

クリニック
- 問診の重要性について。
- 学校医の先生との連携頻度や内容について。
- 発育異常が見られる子供の早期発見と対応について。
- 不安な気持ちを抱える子供への対応の仕方について。
- 学校と医療機関との連携について。健診に行く際に, 児童の肥満の状況などを見て助言されており，養護教諭と多くの情報を共有されていた。学校医として，常に養護教諭との連携が取れるような環境にされており，学校感染症については常に連絡を取り合いたい，と言われていた。
- 医師から見た患者や保護者と医師の求める保護者のありかたについて。

一般病院（外来のみ）
- 保護者の悩みや不安を聞く場面の見学では，不安に対してはしっかりと褒めるという基本的なことの大切さを学んだ。
- 子どもの苦痛を最小限にする看護技術について，医師は聴診触診の際に正確に短い時間で行っており，子どもにとって聴診や触診のために体に触れられるのは苦痛の瞬間にもなるということを知った。子供たちの発達段階に合った形で苦痛を最小限にするための技術を持たなければならない。
- 子どもへのプレパレーションの重要性を知った。看護師は着用しているキャラクターのエプロンもプレパーレーションの一つとして活用していた。
- 子どもや保護者が安心できるような声掛けの大切さ。来院者は体の状態や生活のことに不安を抱えて医師に質問や確認をされていた。乳児健診では母親が育児に対する不安を抱えており，看護師は，健診の前後どちらかに個別で話を聞き, 子育て中の感情の変化や不安, 悩みを聞いて寄り添っていた。
- 健康教育，保健教育の重要性について，治療方針が決まっても本人が治療を受け入れて実践していくかは本人次第であるということを実感した。
- 学校と医療機関の連携について，学校検尿の数値に異常があった子どもが病院で精密検査を受け，その結果を伝えられている場面に同席できた。学校健診後の受診結果まで目を配るべきであると考えた。

一般病院（外来・病棟）
- コミュニケーションの方法として，傾聴やマッチングが印象に残った。看護師は患者さんの話を聞く際に視線を合わせたり，うなずいたりしながら肩をポンポンと触りながら話を聞いていた。
- 傾聴することであなたのことを大事に思っている気にかけているということが相手に伝わり，信頼関係に繋がっているなど理解することができた。
- 学校と家庭との連携について学びを深めることはできなかったが，病院側が学校や養護教諭，教員に対して緊急時どういう対応を望んでいるかについては学ぶことができた。
- 家庭と病院を繋ぐ架け橋になること。言語非言語コミュニケーションの大切さ。してあげたいではなく, 相手がどうしたいのかを尊重すること。日々の関わり, 児童サイドだけではなく, 家族や周囲の人との関わり, 1人の子供を多方面から支援することの大切さを学んだ。
- 学校と医療機関の連携として，緊急外来時，児童生徒の情報を正確に伝えられるように日頃からコミュニケーションをとることの大切さ。

地域医療支援病院
- 看護師の動きや子供，保護者とのコミュニケーションの取り方，診察室の工夫や問診，診察の様子，待合室

や診察室での親子の様子など学べた。

- 小児外来ではミスが起こりにくい問診の方法や，子供の不安を和らげるコミュニケーションの取り方，保護者へのケアの方法などを学んだ。
- 小児病棟では，ある程度関係性ができている中で，どんな明るさで，どんな声掛けをされているか。どこを見て，どのような判断をされているのか。実際に見学し，学ぶことができた。
- 問診の重要性について。子供は自身の体調をうまく言葉で言い表せないことがあり，バイタルサインや仕草や表情を見て総合的に判断し，的確なアセスメントを立てる必要がある。
- 保護者に対する支援の大切さについて。小児外来では，看護師の方が保護者の話を受動的に聞いておられたことが印象的で，看護師の方は保護者の味方として保護者の良き相談相手になれるよう心掛けておられた。
- 学校，病院，家庭の連携の大切さについて。それぞれの立場で子供を中心にみる，持っている情報をすり合わせることで，より子供に寄り添った支援ができる。
- 学校と医療機関の連携について。心の発達外来では，特性や様々な悩みを抱えた子供たちが来院され，保護者，担任，養護教諭と学校で気を付ける事項等を共有されていた。病院から養護教諭や担任へ個別に連絡されることもあるとのことだった。
- 患者さんに関わる看護師，医師，その他関係者が同じ情報を共有し，同じ問題を共有していた。積極的な情報共有の大切さや子供に関わる周りの大人との連携サポートが大事であることを学べた。
- ご家族への接し方やコミュニケーションの方法として，子供本人だけではなく保護者にもあなたも気にかけていますよと感じてもらうこと。家族の相談窓口としての役割を果たすことが大切だと学べた。
- 疾病について，実際の症状やその診察，診断方法まで見ることができた。
- 患者さんへの声かけやカウンセリング術，掲示物の工夫を知れた。
- ホスピタルプレースペシャリストについて知れた。
- 子供と接する際には，児童生徒に寄り添い，安心できるような声の大きさ，声のトーン，表情，言葉遣いを意識して対応したいと感じた。
- コミュニケーションは意識的に自分からすることが大切であると学んだ。それぞれの職種の専門性を生かして連携するためには，自分自身の職業の専門性や役割というものを理解することが重要であると学んだ。

学生が持つ実習目標と自己評価による達成状況について

学生は実習前に実習に向けての個別の実習目標を立てている。目標とその達成状況として自己評価していることをまとめた。

【看護技術の基本を学ぶ】

- 医師が子どもへ安心する声掛けをしていたり，問診をしっかりと行ったうえで，適切な処置をされているのを観察し，吸収することが出来た。
- 患者をよく観察し，少しの変化や行動についても着目する必要性について理解できた。
- 年齢に応じたコミュニケーション支援を行う重要性について知ることができた。

【自身の養護教諭に必要な知識・技能の習得度合いを明確にし，今後の学びに活かすことができるようになる】

- バイタルサインや看護師さんの対応などから自身にできていることとできていないことを明確にすることができた。

【発育の異常の早期発見及び対応の仕方を学ぶ】

- 講話や診察を通して，発育の異常の早期発見の方法と重要性，その後の対応について理解することが出来た。

【様々な健康レベルにある患者さんやそのご家族の方との接し方，コミュニケーション方法を積極的に学び取る】

- 子供本人だけではなく保護者にもあなたも気にかけていますよと感じてもらうこと。家族の相談窓口としての役割を果たすことが大切だと学べた。

【障害疾病の理解を深めて，今よりも各疾病について説明ができるようになる】

- 教科書や本で得た知識だけではなく，実際の症状やその診察，診断方法まで見ることができた。

【患者さんの様子を見てアセスメントを行うときの正しい方法を学ぶ】

- ケアの見学はできたが，アセスメントの達成度はコミュニケーションに比べて少し低かった。

【患者とのコミュニケーションの方法や，患者とその家族との関わり方を学ぶ】

- 傾聴やマッチングというコミュニケーションスキルを学んだ。
- 患者さんの話を聞く際に視線を合わせたり，うなずいたりしながら肩をポンポンと触りながら話を聞いている。
- 看護師さんの関わり方を実際に見て，触れる前に声掛けをするなどの新しい学びを多く得られた。

【安心感を与えるとともに，気分を和らげるようなアプローチ方法を学ぶ】
・患者だけでなく，保護者に対しても安心感をもたらす説明や治療法について説明する重要性について学ぶことができた。
【病院を怖がる子どもに対する緊張のほぐし方，恐怖感を与えないやり方を学ぶ】
・診察風景を見学し吸収することが出来た。
【病院や医療機関がどのような働きをしているのかを知り，説明できるようになる】
・病棟と外来の動きや連携の仕方を見ることができ達成できた。
・患者さんに関わる看護師，医師，その他関係者が同じ情報を共有し，同じ問題を共有していた。そこから積極的な情報共有の大切さや子供に関わる周りの大人との連携サポートが大事であることを学べた。
【病院と学校との連携について学ぶ】
・健康診断を見学し，養護教諭と学校医との話を聞くことにより理解することが出来た。
・校医の経験での事例等挙げていただき，学べた。
・病院が緊急時に学校や養護教諭，教員に対してどのような対応をしてほしいかについては学べた。
・病院と学校の連携の理解についてはあまり達成できなかった。
・学校医が養護教諭に対する考え，求めていることを教えていただくことが出来，学ぶことが出来た。

以下は，目標が立っていたが，実習後の自己評価として学生の発言のうちに表現されていないため，実習目標のみ記載する。

【病院の役割や健康教育の重要性を学ぶ】

【小児に多い疾患や健康問題への理解を深め，養護教諭に求められるケアは何かについて考える】

【看護の対象となる人が療養している環境を知る】

【医療的専門知識の向上を，様々な診療科を見学させていただく中で目指せるよう積極的に実習に参加する】

【病院が学校に求めているニーズや姿勢をしっかりと把握することで，チーム学校またはチーム地域として円滑な対応ができるよ，実践的そして応用的な学びを意識する】

考　察

実習内容について，クリニックでは医師による診察の場面に接し，患者である子どもと保護者の様子を見学することが出来ている。また，指導者は実習デザインを自由に構築して，学校健診にも帯同させていただき，診察場面以外での医師と学校との関わりについても学ばせていただいていた。

一般病院のうち，総合病院でない場合には，外来での実習が主となっており，外来では医師の診察の場面での見学が多く，医師が体験学習の実施も含めて，熱心に実習指導に関与していただいていた。専門外来の見学により，貴重な実例に触れることが出来ており，健診，予防接種の見学により多数の健常児と保護者の様子も見学の機会が得られている。病児保育での実習などもさせていいている。また，一般病院では看護師のシャドーイングが実施され，多種の看護ケアと患者との関わり場面が見学できている。シャドーイングを行う場合には，指導者と学生が１対１の時もあれば指導者１人に複数の学生が付く場合もある。施設によれば，コメディカルの指導を受ける機会が得られている。

地域医療支援病院では，小児科外来と病棟での実習が行われており，その他診療部門が多岐に渡る施設であるところから幅広い年代，多種の疾患の患者とその看護，治療経過に携わることが出来ている。病棟では様々な看護ケアの見学が出来ている。

それぞれの実習施設で様々な看護・医療提供場面，看護者のコミュニケーションの取り方，医師やその他医療者の専門性に触れる実習がなされていた。外来での実習では医師が積極的に学生指導にあたっていただいており，診察の合間の解説は学生の印象に残る学びになっている。しかし，看護師との関わり，看護ケアに触れる機会は少なくなる傾向にあり，特に実習内で学生が唯一実施できる看護技術としているバイタルサイン測定は実施できていない状況である。外来受診場面でのバイタルサインの測定は相当高いスキルが求められるため，実習では病棟実習中に限られる。このような実習施設による実習内容の違いについては，事前･事後指導の中でフォローしていく必要がある。

学生の学びとしては，看護者が行うコミュニケーションについて良く学べている。患者に対するもの，小児科であれば保護者に対するものについて看護者が様々なコミュニケーションスキルを活用していることについて理解するに至っている。また，施設内では他部門の専門職に触れる機会があり，病院内での他職種連携状況を学ん

でいる。関連して，病院と学校との連携についてもその必要性，望ましい具体的連携方法についても学べている。学生は自身が養護教諭になることを前提に考えを及ぼすため，子どもとのコミュニケーションの方法，学校と医療施設との連携については理解しやすいものと思われる。一方で，コミュニケーション以外の看護技術について学びを得たとの発言は少ない。看護者がみる患者の状況とフィジカルアセスメント，看護判断について触れる機会が少ない状況であったのか，これらのことを実習目標に挙げている学生についても到達できないと評価している。看護臨床実習では，臨床現場において，看護師が行う看護判断と看護ケアの一連のプロセスを学ぶことに意味があり，それはこのプロセスは将来養護教諭として職務を行う際に反映させるべき基本的フォームであるからだ。今後の課題として，この目的の到達に向けた教員と実習担当者の協議の必要があると考えられ，また実習に至るまでの看護学関連の授業構成についても再考すべき点があると考えられた。

このまとめについては，教員のサジェスチョンを含まない，学生の自主的発言をまとめたものであり，実習内容，学びのすべてを網羅できているとは限らない。しかし，今回のまとめは，より有意義な看護臨床実習の確立に向けた検討のための資料となると考える。